

(追悼文)

野村俊明先生を偲んで

日本医科大学物理学教室

藤崎弘士

野村先生とは本学の教養のキャンパスが新丸子にあったときから現在の武蔵境に移転するまでの10年以上、同僚としてお付き合いさせていただいたが、いわゆる「上司」という感じは微塵もなく、常に気さくでチャーミングな先生であられた。こんなに早く亡くなられるとは想像もしていなかったが、先生から受けたご指導やご恩を思い出し、記録に留めるためにこの原稿をしたためている。

着任されたときは教授会ではほぼ満場一致で選任されたという話を、物理学教室の香川教授（当時）から聞いた。日医大のOBではあるが、東大文学部の哲学科を出ているという異色の経歴の持ち主とお聞きして、いろいろなところを転々としてきた自分との共通項があるのではないかと勝手に親近感をもっていた。当時の日記（ブログ）を見返すと2009年11月5日に「野村先生と今後の方針について」とある。私が本学に着任したのは2009年10月であるので、これは相当早い時期から野村先生から指導を受けていたようだ。細かいことにさりげなく気を配られる先生のこと、40歳近くまでポスドクをやっていた私のことを、すぐに馴染めるだろうかと心配されて、早めに声を掛けてくださったのだろう。特に医学部という、私にとって「異質な」世界とどのように付き合っていくかということに関して、話していただいたと記憶している。私のブログでの登場回数はとても多い。いつも気軽に声を掛けていただき、またこちらからも声をお掛けして、相談に乗っていただいていた。

2014年に私は本学1年生の担任になったが、その際に非常に重たい問題が発生したことがあった。医学に詳しくはないが、自分ではノイローゼになりかけているのではと思うような状況だった。野村先生はそのとき基礎科学の主任でいろいろと相談する機会があり、精神面で本当に助けていただいた。野村先生は拘置所や医療刑務所で働かれていたこともあり、「もっとひどいケースを扱ったことがあるから大丈夫」と言われてだいぶ気が楽になったことを思い出す。

また2016年1月21日のブログには薬理学の鈴木秀典教授とお会いするという記述がある。これは野村先生から形成外科の小川令先生のやっていることが「物理的」なので、何か共同でできるかもしれない、そこでその当時研究部長の鈴木先生に聞いてみたら、というお誘いがあったことと記憶している。私はあまり後先を考えないタイプなので、軽く考えてこの話に乗ってしまい、その後小川先生ともお話しすることとなった。そうこうしているうちに、あれよあれよという間に小川先生のAMEDプロジェクト（メカノバイオロジー）に加えていただくという僥倖に巡り合うことができた。これに関しては野村先生なくては全く考えられないことであり、また私の研究の幅を広げていただいたということでも感謝することしきりである。

またこれは雑務的なことではあるが、2018年ごろに武蔵境での教育のICT（Information and Communication Technology）化を進めるにあたり野村先生に調査を命じられたことがあった。これはコロナ禍の現在では必須のことであり、日医大も当時からICT化を推進していたが、当時はそんなに切迫感がなく、学内のe-learningのシステムなどもほとんど使われていなかったように思う。しかし、私はこの頃からAI（人工知能）に興味をもつようになっており、現在AIに関連する教育や研究をするようになっていたので、ここでの体験はいいきっかけとなった。

2019年に教授に昇進するにあたり、野村先生にはその数年前に推薦のお声をいただき、こちらも了承したのだが、その当時私は研究のアクティビティが落ちていた。野村先生は文句が出ない状態で申請したいということで、なんとか論文を書いてから申請書を作成し、野村先生に納得していただけた。私の不明を恥じるばかりだが、野村先生は物事を進めるときは非常に慎重であるということを知った。また面接その他の指導も非常に細やかなものであった。初めて教授会に参加したときには野村先生の横に座らせていただいた。

以上のように野村先生には基礎科学での教育や研究に関して、支援や助力をしていただいたが、よくよく考えてみると、野村先生がどういう研究をやられている先生なのかということ（もちろん心理学の教授であり、学生相談室の室長だということは知っていたが）をよく知らなかった。2020年の2月の教授会の帰りに野村先生から「高齢受刑者の現状と支援」という先生の書いた別刷を渡された。これは受刑者が高齢化する、もしくは高齢の受刑者を収監すると、認知症などの問題が現れて、そのケアをするべきなのか、処罰を与え続けるべきなのかという

問題が生じるという話で、世界的にも大きな問題になっていることを知った。こういう問題を初めて知ることが目から鱗であったのと同時に、このようなことを研究し、実際に拘置所などで働いている野村先生ならではのテーマであり、自分にあつた研究をするというのはこういうことかと会得した。

野村先生は2020年3月で退職されたが、そのころ私の母の直腸がんが見つかり、それを永山病院で手術してもらうときにも、お忙しい時期にも関わらず永山病院と連絡をとってくださった。そのころはコロナ禍が始まって非常事態宣言などが出ており、当時私は武蔵境校舎の互助会である新和会の会長であつたが、送迎会を開けなかつたことが悔やまれる。



図1 野村先生のお見送り(2020年3月31日)

2020年の4月からは武蔵境校舎も完全にコロナ対応となり、どのように講義や実習を行うかということでみなてんやわんやであつた。野村先生とも会うこともなくなり、コロナが落ち着いたところに飲み会とかをやりたいものだところでは話し合っていた。またその頃、ちょうど野村先生に相談したいこともあり、個人的にでも会いたいものだと考えていたが、その頃に野村先生が膵臓がんにかかれたという知らせを受けた。医学に詳しくない私ではあるが、膵臓がんの予後が悪いということは知っていたので、早めにお会いしたほうがいいという気がした。

そこでコロナの波の合間の2021年3月23日に吉祥寺の中華料理屋でお会いすることになった。野村先生は帽子をかぶって来られたが、思ったより元気そうに見える、以前のように楽しく雑談することができた。

それからしばらくして2021年の8月ごろに野村先生から著書「刑務所の精神科医」を送りたいから住所を教えてくださいと連絡があった。その本は以前にいただいた別刷で垣間見ることのできた、野村先生のこれまでの精神医学における研究や臨床の現場のことが臨場感をもって書かれており、先生のこれまでの総まとめの本と受け止めた。専門向けの本ではないので、ぜひこれはいろんな人に読んでもらいたい本である。また野村先生の哲学や思想が折に触れて出てくるところが私には頷けるものがあった。その後、感想をメールし、それに対するお返事メールには「在職中お世話になった方々に献呈しました。私の仕事の一つのまとめです」とあった。

年が明けて2022年1月末に野村先生が永眠されたことを知った。無論残念ではあったが、やはりという気持ちもあった。せめてものご恩返しにということで、この紀要で追悼特集を組むことを中村先生や吉川先生と決めた。集まった原稿を拝見すると、やはりいかに野村先生が気配りの人か、ということが感じられる。ただし、気配りをするためには日頃のコミュニケーションが欠かせないわけであり、何気ない雑談がその元になっていたのだな、ということにも気づかされる。(現在のコロナ禍でそのような何気ないコミュニケーションの重要性が富みに増しているように思う。)野村先生とは電車などで一緒になると、お互い最近見た映画のことなどを話し合ったことを思い出す。

その他にも野村先生に助けていただいたり、お世話になったことは多い。野村先生どうもありがとうございました。合掌。